



武庫川女子大学「甲子園会館」で開催された「清林文庫」展

## 「清林文庫」東畑謙三の建築博物誌の宇宙

金沢工業大学環境・建築学部建築系教授 金沢工業大学ライブラリーセンター館長

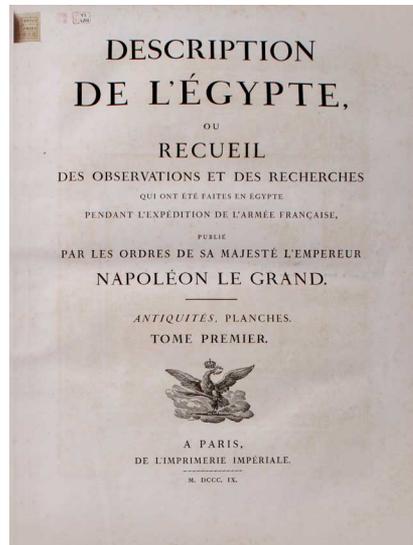
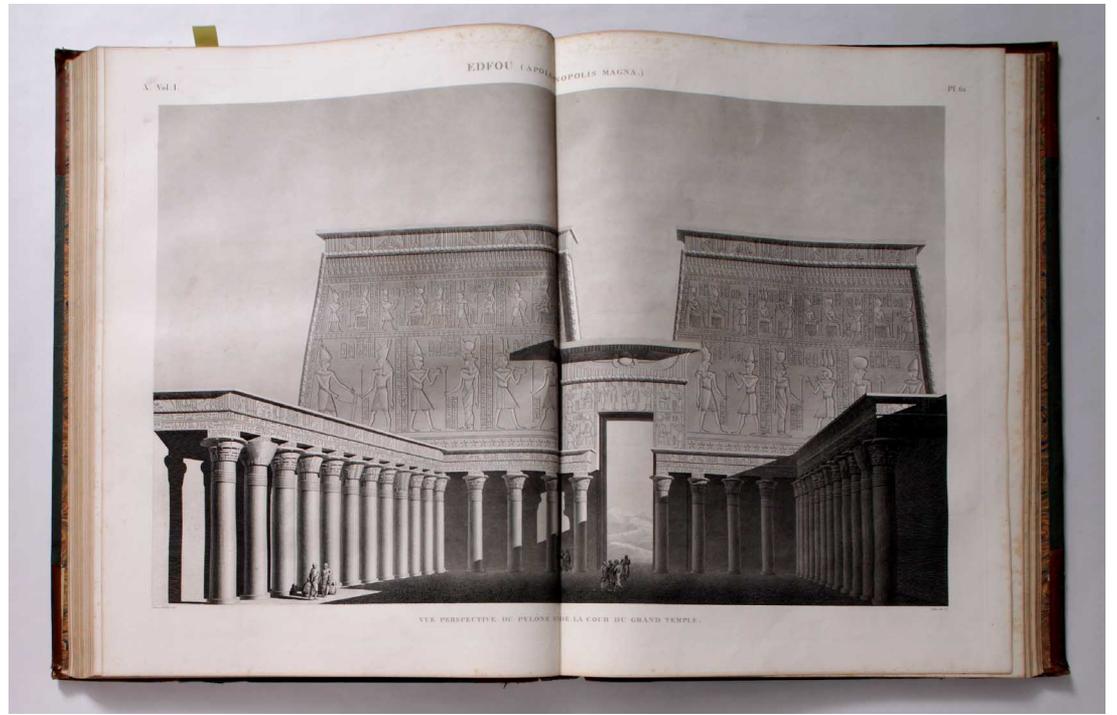
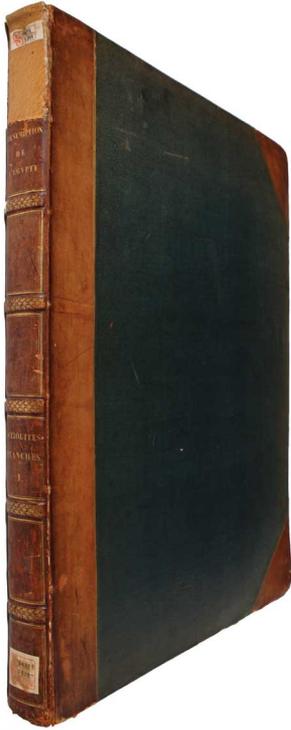
### 笹 覚暁

東畑謙三氏が蒐集された「清林文庫」は、絵画、書蹟、彫刻等の美術、さらに工芸、建築、考古学、文化史の諸分野にわたる古書を中心とした一万五千冊を越える膨大なコレクションである。このうち、建築書は千五百冊にたらんとする量で全体の約一割を占めている。最も古い書物は1521年出版のものであり、最も新しいものは1993年のものであるから四百七十余年にわたる蒐集ということになる。洋書は千五百五十冊含まれており、そのなかで筆者が判断して歴史的価値ないし稀覯書の価値に富むと認められたものは六百十余冊に上った。これを時代別に分けると、十五世紀のものが一冊、十六世紀のものが四冊、十七世紀のものが十冊、十八世紀のものは四十七冊、十九世紀前半のものが百十余冊、十九世紀後半のものが百二十余冊、二十世紀前半のものが三百二十余冊ということになる。従って歴史的価値から言えば、このコレクションは十八世紀と十九世紀が中心の蒐集であると言える。筆者の知る限りでは、我が国における建築書コレクションとして、その量と質において最大にして最良のものである。

その内容について記すと、圧倒的に多数を占めると同時に組織的、包括的に蒐集されているのは、イタリア、フランス、スペイン、スイス、ドイツ、イギリス、スウェーデン、ノルウェイ、ロシアなどのヨーロッパ各国および米国、またローマ、ヴェネツィア、パリ、ロンドン、モスクワ、コンスタンティノーブル、イエルサレムなど諸都市の歴史的建築、さらにはヌビアやチュニジア、エジプトなどアフリカ諸国、インド、カンボジア、インドネシアな

どアジア各国の歴史的建築を美しい図版でもって収載した書物、建築図誌である。また、そうした建築遺構を廻った調査旅行記やサン・ピエトロ寺院やヴァティカン、サンタ・マリア・デル・フィオーレ寺院、サン・マルコ寺院、ウインザー宮殿、ウェストミンスター寺院、オクスフォード大学、ケンブリッジ大学などの主要な歴史的建築のモノグラフなども多数含まれている。さらにはエジプト、ギリシア、イタリアそしてアジア各国などの歴史的建築の考古学的研究書も蒐集されている。これらの書物の刊行年は前述のように十五世紀から二十世紀にわたっていて、このコレクションは空間的にも時間的にも膨大な範囲の建築作品をカバーする、いわば世界の歴史的建築博物図誌と言ふべき一大書物群を構成しているのであって、まさに壮観と言うよりほかにない。

そのうちの主要なものを挙げると、これは純粋な建築書ではないが、初めてヨーロッパの有名都市図が美しい木版画で多数収載されたので、建築史家にも有名になったシェーデルの「ニュルンベルク年代記(1493年)」がある。これはインクナブラであり、おそらく「清林文庫」中で最も価値の高いもののひとつであろう。十六世紀のものでは1574年に出版された、おそらくはデュペラックという地図製作者の手になる古代ローマ地図に基づいて制作されたアンドルーエ・デュ・セルソーのやや空想的な描写による「古代ローマ建築(1584年)」があり、十七世紀のものでは、C・フォンタナの浩瀚なヴァティカンとサン・ピエトロ寺院の歴史「ヴァティカンの寺



ナポレオン「エジプト誌」初版・全23巻・超大判  
Description de l'Égypte 1809-1822

院(1644年)、フランス国王官房が編纂した「ルーヴル宮殿およびテュイルリー宮殿(1669-1710-1727年)」、ノランの「ヴェルサイユ宮殿(1672-89年)」、オクスフォード大学編の「オクソニア図誌(1675年)」、キアムピントの「コンスタンティヌス大帝の聖堂建設の梗概(1693年)」のような重要なモノグラフが含まれている。

十八世紀のものでは、ダールベルクのスウェーデン建築通覧「スウェーデンの歴史的建築及び現代建築(1730年)」が貴重である。また、新古典主義の情報源となりその興隆の切掛けを与えたステュアートおよびレヴェットの「古代アテネ(1762-1816年)」、ル・ロワの「ギリシアの美しい記念建造物の廃墟(1770年)」などのギリシア古代建築の考古学的調査に基づく図誌や、この種の調査旅行記としては最初のもののひとつであって、その後多くの追随者を産んだジョウシュール＝グフィエ伯爵のギリシア調査旅行記、「ギリシアの絵画的紀行(1782-1809-1822年)」などの重要書がある。さらにツァッタが出版した「サン・マルコ統領大聖堂(1761年)」や新古典主義室内装飾に大きな影響を与えたキャメロンの「ローマ浴場図誌及び解説(1775年、第二版)」などのモノグラフがある。

十九世紀のものでは、ナポレオンが自らのエジプト遠征に際して調査研究を命じて作らせた超大判二十三巻の「エジプト誌(1809-22年)」がやはり白眉であろう。これを補完するものとして、ドイツのエジプト学を創始したレプシウスの「エジプト及びエチオピアの記念建造物(1846-55年)」

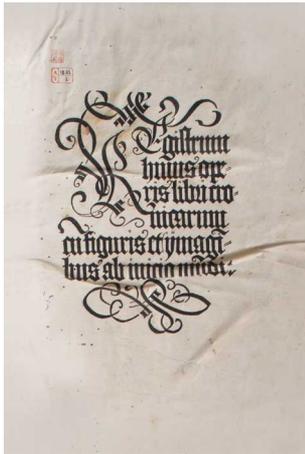
十二巻、ガウの「ヌビアの古代(1822年)」も蒐集されている。ギリシアに関してはステュアートの著書を補完するペンローズの「アテネ建築原理の研究(1888年)」やフランス政府の命で調査したテクシエの「小アジア遺跡詳説(1839-49年)」がある。ペレス・デ・ビリャ・アミルの「スペインの美術と記念建造物(1842-50年)」やカドリの「ヴェネツィア大運河(1858年)」のような建築通覧図誌、またジョーンズとグーリーの「アルハンブラの建築詳細図(1842-45年)」、十七世紀のフォンタナの「ヴァティカンの寺院」を補完するルタルリーの「ローマのサン・ピエトロ寺院とヴァティカン(1882年)」、アッカーマンの美しい彩色アクアティント図版による「オクスフォード大学史(1814年)」と「ケンブリッジ大学史(1815年)」などの優れたモノグラフがある。

二十世紀になるとそれまで探検や調査、旅行が及んでいなかった地域、インド、カンボジア、インドネシア、西域などのアジア各地域にも調査の手が伸びてくるので、こうした地域の建築や記念建造物に関する図誌やモノグラフが多く出版されるようになるのであるが、本コレクションではその部分も大変良く目配りの効いた蒐集がなされている。

次に、建築論書であるがこの蒐集は比較的少ない。しかし、十六世紀において最も影響力の大きかった二書、チェザリアーノによる最初のイタリア語訳版で最も美しい版とされる「ウィトルウィウス建築十書(1521年)」とパラディオの「建築四書(1570年)」、そして十六世紀建築技術の金字塔

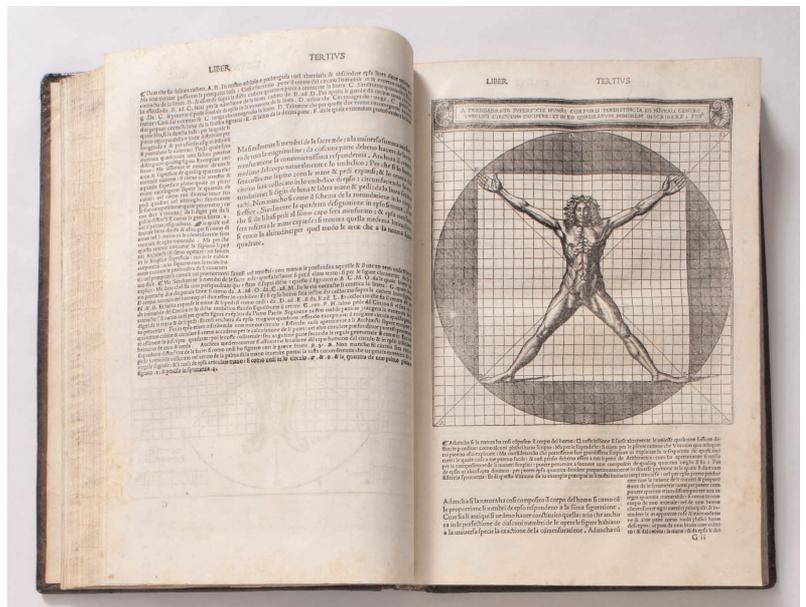
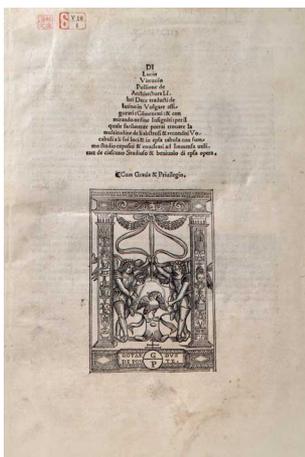
シェーデル「ニュルンベルク年代記」

Liber Chronicarum 1493



ウィトルウィウス「建築十書」イタリア語版初版

De Architectura Libri Dece 1521



のひとつであるD・フォンタナの「ヴァティカンのオベリスキの移動 (1590年)」が収蔵されており、十七世紀のものではセルリオの「建築作品集 (1600年)」、アンドルーエ・デュ・セルソーの「フランスの優れた建築 (1607年)」および「ジャック・アンドルーエ・デュ・セルソーの建築書 (1611年)」、スカモッツィの「普遍建築の観念 (1615年)」、ル・ミュエの「良き建築の方法 (1681年)」がある。

十八世紀のイタリア建築論書ではガリアーニの「ウィトルウィウス建築十書 (1758年)」、スカモッツィの「スカモッツィ建築作品集 (1713年)」があり、フランス建築論書では十七世紀半ばにマローが作成したフランス建築の重要な図版を含むリエットの「フランスの建築 (1727年)」、都市計画論における先駆的なパットの二書、「ルイ十五世の栄光に対してフランスに建立される記念碑 (1765年)」および「重要な建築作品についての回想録 (1769年)」がある。

イギリス建築論書では、ケントの「イニゴ・ジョーンズのデザイン (1727年)」、イギリスにおけるパラディオ主義の興隆を決定づけた三書、キャンベルの英国名建築作品集「ウィトルウィウス・ブリタンニクス (1715-25年)」、レオーニ編訳の「パラディオ建築四書 (1742年)」およびウエアの「建築の完全体 (1756年)」が所蔵されている。また新古典主義建築の勃興に大きく寄与したドイツ建築論書、フィッシャー・フォン・エルラッハの「歴史的建築の構想 (1725年・第二版)」、さらに「ウィトルウィウス・

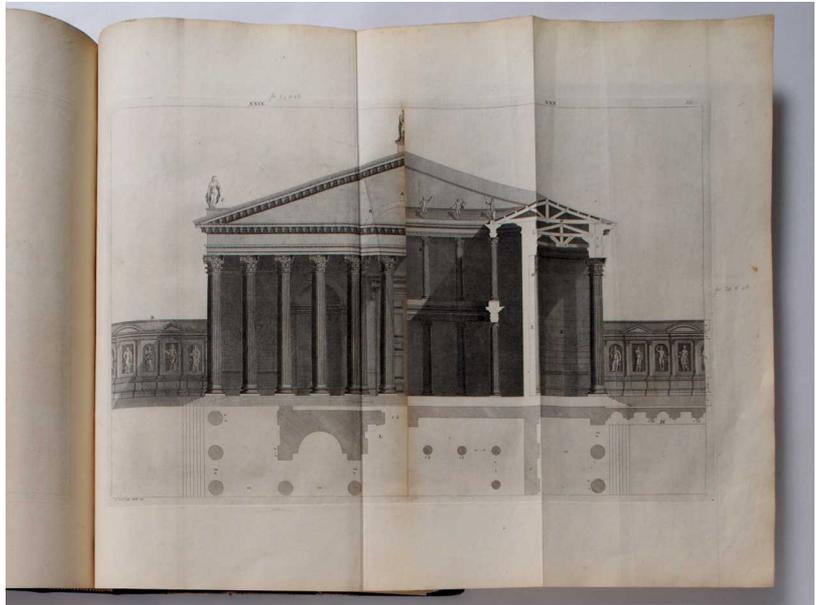
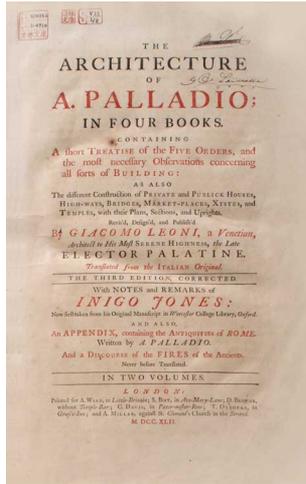
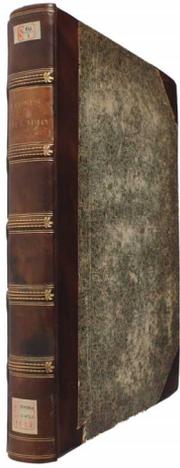
ブリタンニクス」に倣って制作されたデンマークの建築論書、スラーの「デンマークのウィトルウィウス (1746-49年)」も収蔵されている。

十九世紀建築論書では、大判図版百七十四枚から成る新古典主義建築に決定的影響を与えたシンケルの「建築計画案集成 (1841-43年)」、ゴシック・リヴァイヴァルおよび建築の社会的思想に決定的影響を与えたラスキンの「建築の七燈 (1849年)」および「ヴェネツィアの石 (1851-53年)」が白眉である。二十世紀前半ではライトの「日本版画 (1912年)」、タウトの「都市の宝冠 (1919年)」およびパウハウス叢書の第四巻「パウハウスの舞台 (1925年?)」、第七巻のグロピウスの「パウハウス工房の新活動 (1925年)」が所蔵されている。以上のように建築論書蒐集は重要なものが蒐集されてはいるけれども組織的包括的なものではない。

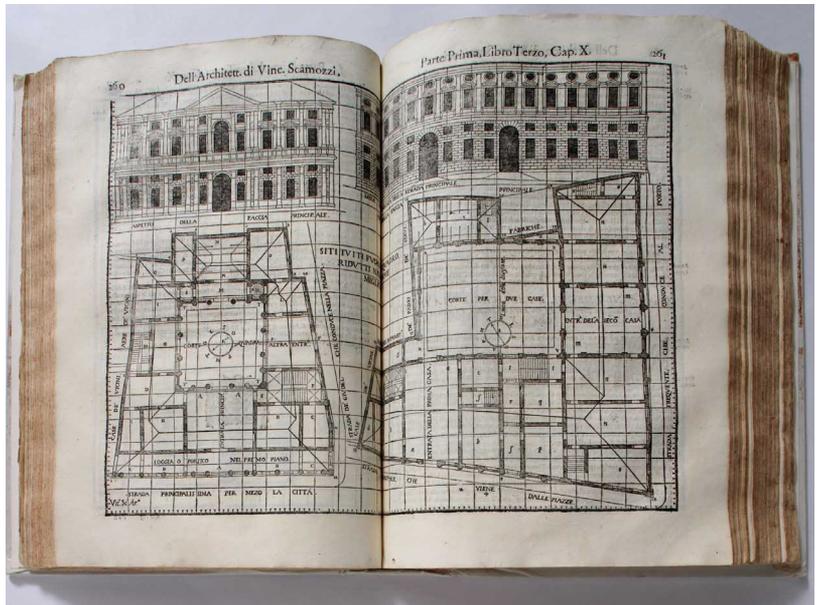
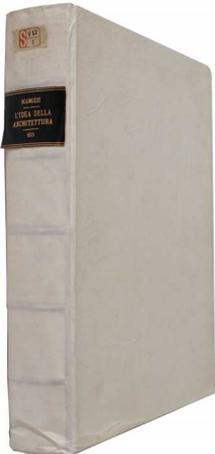
「清林文庫」の建築書コレクションの概要は以上のようなものであるが、ここに所蔵されている書物群の最大かつ基幹的な部分は、実は十八世紀、十九世紀に活躍した新古典主義や折衷主義の建築家たちや彼らの施主である王侯貴族や富裕な階級の人びとによく読まれていたものであり、彼らの建築的教養またデザイン・ソースの基本を形成したもののなのである。このコレクションは学者の蒐集とは蒐め方が異なっており、私には優れた新古典主義ないし折衷主義建築家のワーキング・ライブラリーのように見えたのであった。

蒐集者の東畑謙三氏は自らを「建築技師」ないし「建築技術者」また「構成技

パラディオ「建築四書」英語版・全2巻  
The Architectura of A.Palladio 1742



スカモツツイ「世界建築の思想」初版・全2巻  
L'Idea della Architectura Universale 1615



師」と呼び「建築家」とは呼ばなかった人であり、その作風は氏の言う「美術建築」の対極にある「工場建築」に体现される合理主義であり、その造形美は抽象的なプロポーシオンの良さ、構成的な美に求められていた。従って氏はいかなる意味でも新古典主義、折衷主義の傾向の人ではないように見える。

しかし、氏の受けた建築教育は、優れた造形能力のあった武田五一の教育に代表されるようなまだ折衷主義的なところのある教育であり、また天沼俊一の建築史には傾倒したと自ら語っているように、氏には建築文化における形態や色彩や様式などの豊饒さ、非合理性に対する深い理解と強い共感があったのではないだろうか。氏の処女作は折衷主義的デザインの東方文化学院京都研究所の設計であるし、その設計に関する氏の回想は誠に楽しげに語られているのである。

氏はあるとき自らの建築実践においては合理主義を貫徹するプロフェッショナルであろうと決断をし、建築における非合理性、氏の言葉で言えば芸術性を断念したのではないのだろうか。そうして私的な書物蒐集の世界では建築造形の豊饒さを楽しみ、建築書に関する該博な知識を駆使してその追究を行ったのではないと思われる。

氏はル・コルビュジェの著「建築をめざして(1923年)」をフランスから取り寄せて、初めて日本へ紹介したと述べ、またパウハウス叢書第六巻、ドゥースブルフの「新構成芸術の基礎概念(1925年?)」を翻訳して、「空間」や

「構成」という訳語を造語したと述べているが、ところが「清林文庫」にはその双方共に収蔵されていない。つまり、この蒐集に関する限り近代合理主義建築への関心は比較的少ないのであって、主要な関心は、それ以前、それ以外の建築造形に向けられているのであり、このことも前述したことを証するものであろう。

いずれにしても、しかし、この豊饒な建築書の宇宙を我が国に創設したことについてはただ感謝というしかない。



ちく・かくぎょう  
1942年生まれ。71年金沢工業大学助手、72年講師、77年助教授、81年教授。85～87年マサチューセッツ工科大学国際研究センターおよび科学・技術・社会(STS)プログラム兼任客員研究員。91～92年米国議会図書館国際研究員。97年から金沢工業大学ライブラリーセンター館長。専門は建築論、西洋建築史、近代建築史、科学技術文化史、稀覯書学。国際稀覯書学会、国際技術史学会の各正会員。日本建築学会理事等を歴任。主な著書に『The Dawn of Science and Technology』KIT Press, 1982年、『建築の誕生—ギリシア・ローマ神殿建築の空間概念』中央公論美術出版、1999年、ほか多数。日本の科学技術における稀覯書学の第一人者として各地の研究活動や講演でも活躍している。